宮崎県立看護大学大学院看護学研究科
平成29年度修士論文要旨

成人看護学実習において学生の看護観が深まる過程の特徴

溝口友美　（基礎看護学）

【キーワーズ】　看護観・学生・看護学実習・看護過程・成人看護学

本研究の目的は，成人看護学実習における学生の看護観が深まる過程の特徴を，学生の看護実践とのつながりにおいて明らかにし，学生が患者の個別性にせまりながら看護を見出し，自己の看護観形成につながる実習指導上の示唆を得ることである。研究対象は，成人看護学実習で，研究者が直接担当した学生のうち，研究への同意を得られた学生15名である。研究方法は，インタビューを行い，看護観につながる内容が詳しく語られた学生の中から，特徴的な3名を選択し分析対象とした。＜学生の実習記録＞＜インタビューでの学生の語り＞＜実習中に教員が記録した学生の表現＞を元に，［三重の関心を注ぎ，必要な看護が提供できる実践方法論の修得］につながったと思われる局面を選択し，学生Aは5局面，学生Bは4局面，学生Cは8局面を選定した。各学生の局面ごとの場面の意味と認識の特徴から，看護観の特徴を抽出し，更に各学生の“看護観が深まる過程の特徴”として以下のように抽出した。

A学生は，これまで育んできた看護観・健康観・人間観をもとに，対象の生命力の在り様を見つめ，療養過程の中で培われた対象の持てる力を見出し，よりよい状態をつくり出すために自然力が高まるよう根拠を持ったケアを意識しながら取り組む過程で，対象のより良い状態への変化が看護の喜びとなるという看護観につながった。

B学生は，患者の目標像が描けていると変化に気付き消耗状態が見えるという見方を持ちながらも，全体像を把握するために多くの情報を取ることが必要という考えが先行し，患者から関わりを断れたと感じた体験を機に，看護者が患者を消耗させてはならないと痛感した。学生が描く患者像の確かさが看護を左右することを自覚し，消耗の激しい患者の状態を追体験することを自己に課し，治療に伴う身体と心の苦痛を感じ取ることで，ケアの必要性を見出し関わることへの意志を定めた。根拠を持ったケアを実践しながら，患者の反応を重ねて評価し，ケアの続行の有無を判断するという意識で関わり，治療の緊張と痛みに耐えていた患者に笑顔が生まれるという関わりにつながった。

C学生は，治療への覚悟を持つ患者の姿から，生活過程はその人らしさを創り出し，治療に向かう力を生み出すと考え，治療による消耗に耐える患者の姿を，治療に前向きな状態と一旦捉えた。治療への対峙のあり方が消耗を助長していないかと見ることの大切さを痛感し，患者像をつくりかえることの大切さを再確認した。消耗が大きくなる患者の姿に動揺し，関わり方を見失うが，その人の人生はその人が創り出すことを大前提として治療への意思決定を支えることを再認識し，患者のセルフケア能力を高めるケアを通して，看護とは，その人自身がより良い状態をつくり出せるよう支えることであるという見方につながった。

学生が実習を通して看護観を形成するには，指導者は，学生の看護実践における判断過程と看護観とのつながりを学生と共に意識化し，看護一般に照らし，学生自身が自問自答できるように関わり，その後の看護実践を通して，自己の看護観の変化・発展と実践との繋がりを意識化するよう支援する。